

## 第 15 回全日本学生柔道体重別団体優勝大会優勝までの軌跡

増地克之\*

### The path to become a champion in the 15th All Japan Student Team Championship

MASUCHI Katsuyuki\*

#### 1. はじめに

平成 25 年 11 月 2 日（土）3 日（祝）に兵庫県尼崎市のベイコム総合体育館で開催された第 15 回全日本学生柔道体重別団体優勝大会において、筑波大学柔道部が 3 年ぶり 3 度目の優勝を取ることができた。本報告において今大会の軌跡をまとめるにあたり、柔道部の現状や部を取り巻く環境を客観的な視点から振り返ることで、今後のさらなる飛躍の一助となれば幸いである。

#### 2. 学生柔道における団体戦の意義

筑波大学柔道部はこれまでの長い歴史の中で、数多くのオリンピック選手や世界チャンピオンを輩出してきた。一方で、大学対抗の柔道の団体戦といえ、柔道本来の姿である体重無差別の 7 人制での試合方式で争う全日本学生柔道優勝大会（以下；春の優勝大会）がその年の大学日本一と称され、今年度で 62 回目を迎えた。しかし、柔道は体重無差別から体重別が主流となり、15 年前に春の優勝大会に加え体重別 7 階級の団体戦である全日本学生柔道体重別団体優勝大会（以下；秋の優勝大会）が始まった。歴史が古い春の優勝大会は体重無差別の団体戦であるため、重量級中心の大会になりがちである。本学柔道部にとっては他の有力私立大学と比較し、重量級の人材確保の点で非常に不利である。現に東京教育大学時代を含め、本学柔道部は優勝を果たしておらず、他の有力私立大学に後塵を拝する形となっている。しかし、体重別の団体戦である秋の優勝大会が開催されるようになったことで、本学が団体戦において優勝を手にする可能性が高くなった。その理由として、筑波大学柔道部は伝統的に軽中量級に良い人材が集まる傾向があり、これまで無差別の団体戦ではあまり陽の目を見ることのなかった軽中量級の選手が主役に躍り出る絶好のチャンスが

巡ってきたことが挙げられる。秋の優勝大会は個人戦と同じ 7 階級にそれぞれ 2 名ずつエントリーすることができ、1 チーム 14 名の編成で、7 名の点取り式の団体戦である。この大会の特別ルールとして、エントリーした階級の 1 階級重いクラスでの出場が認められており、手薄な階級があれば 1 階級軽いクラスの選手を上級のクラスに出場させることができる。また、通常体重別の団体戦は軽い階級（男子は 60kg 級）から順に試合を行うのだが、この秋の優勝大会は事前の抽選で配列を決めることになっており、各階級の選手はいかなる試合展開でも自分の役割を果たせるよう準備しなければならない。団体戦には勝負の流れがあるため、配列が試合の勝敗を左右するといっても過言ではないのである。

大学柔道では春と秋の優勝大会、さらに秋の優勝大会の約 1 か月前に開催される全日本学生体重別選手権大会（個人戦）の 3 大会をいわゆるインカレと呼んでいる。柔道はオリンピックに代表されるように個人競技という位置づけが強い競技である。しかしながら、現役の世界チャンピオンでさえ学生であれば躊躇うことなく団体戦出場を志願するのには訳があり、前者 2 つの優勝大会こそが大学の威信と名誉をかけた大会であり、柔道を志す学生が目指すべき最高峰の大会だからである。

#### 3. 試合

今大会を改めて振り返ると、本学を除き過去 14 回の大会で優勝経験のある東海大学（7 回）、国士舘大学（3 回）、明治大学（2 回）の 3 校全てを突破しなければ優勝できない非常に厳しい組合せであった。特に決勝戦で対戦した東海大学は今年 6 月の春の優勝大会において 6 連覇を達成し、秋の優勝大会も 2 連覇中というまさに優勝候補筆頭であり、8 月に行われた世界柔道選手権で優勝を果たした高藤選

\* 筑波大学体育系  
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

手をはじめ、強力な布陣で今大会に臨んでいた。本学柔道部も西山雄希主将（体育4年）を筆頭に、今年のユニバーシアード柔道競技81kg級のチャンピオンである永瀬貴規（体育2年）、さらには今年の全日本学生73kg級のチャンピオン安昌林（体育2年）を中心に十分優勝を狙えるチームであった。3回戦の国士舘大学に3対1、準決勝の明治大学に4対2と優勝経験のある2校に対して一度もリードを許さず勝ち上がり、昨年に引き続き決勝戦で東海大学と対戦することとなった。先鋒戦で近藤拓也（体育4年）が相手チームの主将に対して「引き分け」に持ち込み、幸先の良いスタートを切ったものの、次鋒、五将が立て続けに「一本負け」を喫し2点リードされる展開となった。中堅戦は本学の主将である西山が、昨年「引き分け」に終わった相手に対して最後まで攻める姿勢を見せ「反則勝ち」を取めた。東海大学が1点リードして残り3つの試合（三将、副将、大将）をむかえることになった。相手チームの大将には世界チャンピオンの高藤選手が控えていることを考えると、何としてでも三将、副将でポイントを取りリードした状況で大将戦を迎えたいと考えていた。しかし、三将の安は終始自分のペースで試合を運んだものの、「引き分け」に終わり俄然東海大学が有利となった。続く副将の永瀬は終了間際に「技あり」を奪い何とか勝利したものの、2対2の内容差で東海大学がリードのまま大将戦を迎えることとなった。本学の大将を務めるのは1年生の田中崇晃で、今大会ここまで2試合に出場し0勝2敗と、彼本来の柔道ができていない状況であった。対戦相手が世界チャンピオンの高藤選手ということで、私自身を含め誰もが対戦前から厳しい戦いになると考えていたが、実際試合になるとお互いの力関係にさほど差がないように感じた。その原因を推測すると、高藤選手は団体戦も含めこれまで数多くのタイトルを取ってきたが、最軽量級であるため団体



写真1 田中が高藤から背負投で「技あり」を奪う

戦に出場する場合はほとんどが先鋒での出番であり、今回のように大将戦（配列では7人目）で、なおかつ自分の勝敗がそのままチームの勝敗に直結する場面での試合は、彼の柔道人生の中で今回が初めてだったのではないかと考えられる。結果は、田中が高藤選手から見事勝利を収め、3年振りとなる3回目の優勝を手にすることができた。団体戦は個人戦とは違う独特の雰囲気があり、世界チャンピオンでさえ自分の持っている力を出し切れない難しさがあることを改めて勉強させられた。一方で、今大会の本学柔道部の戦いを振り返ると、「しっかり組んで投げる」という柔道本来の姿を最後まで貫いてくれたように思う。そして最後まで諦めずに戦うことが如何に大事かということを私自身改めて学生達から教えられた大会であった。



写真2 表彰式

#### 4. 筑波大学柔道部の現状

ここで筑波大学柔道部の現状について少し触れさせていただく。現在部員は男子学生38名、女子学生15名、合計53名で日々稽古に励んでいる。この他に、大学院生や実業団に所属しながら本学の道場で稽古をする卒業生などが学生と一緒に汗を流し、なおかつコーチとして学生の指導に携わっている。他大学などでは、男女別々の指導者が常駐し、練習環境も別々に整えられているが、本学柔道部は男女の区別がなく同じ道場で同じ練習メニューをこなしている。男女一緒に稽古を行うことは一長一短あるが（ここではどちらが良いかは言及しない）、監督の下に男女それぞれのコーチを置き、そのコーチ達にある程度責任を持たせ、学生の考えやその日のコンディションなどを、コーチを通して監督である私が把握するように心がけている。また、我々指導者の役割として学生を強くさせることと同時に、コーチら卒業生を一人前の指導者に育成していくことも重要だと考えている。学生を指導する場を卒業生に

与えることで、いわゆるインターンシップを経験することになり、将来指導者となった際に大いに役立つと考えている。また、筆者自身もそうであったが、現役の選手が学生を客観的に見て指導することで自分自身の技術向上にも繋がると考えている。

次に、柔道部の学生の内訳を紹介すると、体育専門学群の学生は48名（推薦29名、AC5名、一般14名）、他学群5名、合計53名となる。本学柔道部の特徴として、推薦入試やAC入試で入学した学生だけでなく、一般入試で入学した学生が全日本と名の付く大会で入賞を果たしていることが挙げられる。これは部員数が一学年20名以上とも言われる他の有力私立大学にはまずあり得ない特徴である。彼らの共通点としては、進学校出身者が多く、高校までは部活の環境があまり整っていなかったという話をよく耳にする。そうした学生が筑波大学の環境に入ること、入学当初こそ稽古の質・量共にについて行くだけで精一杯であるが、自分で考える能力が誰よりも長けていることから学年が上がるにつれて徐々に頭角を現してくる。そして本学柔道部は、部員数も少数であるため試合に出るチャンスも多くあり、学生もしっかりと目標を見据えて努力することができるのである。また、一般で入学した学生が結果を残すことで、推薦で入学した学生も負けられないという意識が生まれ相乗効果を生んでいるように思われる。このように柔道部の中で学生それぞれのレベルが違うものの、個々に目標を持ちながら日々邁進していくことこそが、筑波大学柔道部のあるべき姿だと考える。

## 5. 茗柏会

ご存知のとおり筑波大学柔道部は、柔道の創始者である嘉納治五郎師範が校長を務めた東京高等師範学校から脈々と伝統が受け継がれており、嘉納師範の柔道の本流に倣う柔道部である。これまで数多くの卒業生が社会に送り出され、「己の完成」と「世の補益」という柔道の究極の目的を実践しながら全国各地で活躍されている。東京高等師範学校、東京教育大学そして筑波大学の卒業生及び修了生のうち柔道を修行した者が入会するのが茗柏会である。茗柏会は、母校柔道部を後援し、併せて柔道の普及振興につとめることを目的としており、本学柔道部の強化にはなくてはならない会である。また、全国各地で活躍されていることもあり、学生が卒業後地元に戻った時などは心強い存在となり多に協力して

いただいている。筑波大学柔道部が活躍できる背景には、こうしたOBやOGの協力なくしては成り立たないものである。

## 6. 練習環境

「4. 筑波大学柔道部の現状」で練習環境について少し述べさせていただいたが、本学柔道部の最も大きな特色は、年間を通じて大勢の海外選手が柔道場を訪れることである。海外選手が道場にいない日がないというくらいであり、多い時には国際合宿並みの人数と高いレベルの選手達が一同に集う。こうした貴重な経験を学生達は積むことができ選手強化の一助となっている。こうした背景には、まず筑波大学が成田空港から近いという利点、さらには格安で宿泊できる体育合宿所が大学に完備されている点が大きく影響している。そしてなりよりも、これまで筑波大学、東京教育大学、東京高等師範学校でご指導にあられた先生や諸先輩方のご尽力により海外での筑波大学柔道部の知名度が上がり、数多くの海外選手が来筑することとなったと考えられる。こうした環境を今後とも絶やすことなく維持していくためにも我々指導者が諸先輩方の意思を継いでいくことが肝要であると考えている。



写真3 海外選手との稽古風景

## 7. 最後に

今回、原稿を執筆し終え、改めて筑波大学柔道部は恵まれた環境で強化をさせていただいていると感じた。大学の理解、これまで長い歴史を築いてこられたOBやOGの温かいご支援を賜り、今回の優勝を果たすことができたと思う。今後とも今回の結果に満足することなくさらなる飛躍を求めて精進していきたい。また、嘉納師範の流れを汲む柔道部として強さだけでなく社会に貢献できる人材を育成し社会に輩出することが我々の使命であると考えている。